

第67号

2019年3月
認定特定非営利活動人

麦の会

TEL & FAX 022-299-1279

〒983-0834 仙台市宮城野区松岡町17-1

郵便振替口座 02200-8-46178

E-mail : muginokai@k5.dion.ne.jp

<http://www.muginokai-koppe.com>

目次	コッペは30周年を迎えました	飯嶋 茂	・・・1 p
	コッペ30周年	阿部 央希	・・・5 p
	コッペ30周年パーティ	斎藤 七恵	・・・6 p
	コッペ30周年記念パーティ	鎌田 啓夢	・・・8 p
	コッペ30周年パーティ	氏家 大介	・・・9 p
	3人6脚	日下 由美	・・・10 p
	新聞記事より		・・・12 p

コッペは30周年を迎えました

認定NPO法人麦の会 代表理事 飯嶋 茂

コッペが開業したのは、1988年12月8日。その1年前ぐらいだったでしょうか、いろいろな人が共に働く場を作りたいという呼びかけがあったのは。その呼びかけに賛同した人たちが話し合いを重ね、できるだけ安心な材料でパンとクッキーを作る、色々な人が共に働く場にする、この2点を大きな柱に、コッペは開業以来運営されてきました。

安心な材料とは具体的に言うと、東北産の小麦を使うこと、オーガニック等の素材の原材料を使うこと、添加物をできるだけ使わないこと、遺伝子組み換えをされていない原料を使うことなどです。その基本を守ってきたおかげで、新商品はあまり出ないし、季節のはやりものも出ないけど、根強いファンの皆様に支えられて商売しています。昨年、JR仙台駅の販売会の時のエピソード。今は東京の大学に娘さんが行っているというお母さん。幼稚園のバザーでよくコッペのクッキーを買っていて娘も大好きだったので、是非東京の娘さんにも送りたいと、たくさん買って行って下さいました。その時はうれしい一言でした。

もう一つの柱、「色々な人が共に働く場」ということは、今は障害のある人が多く働くようになり、「障害のある人も共に」がメインになっていますが、当初の「色々な」には、もっと広く社会的に弱い立場にいる人と共にという意味合いが強くありました。そもそもコッペをやりたいと言い出した人は、在日韓国人を支援する団体の人だった

のです。色々な人が働くコッペをやることで、差別のない社会をつくりたい。その差別は、障害者差別にとどまらず、在日韓国人に対する差別、女性差別、ホームレスの人に対する差別、性的少数者の人に対する差別、部落差別等々、あらゆる差別をなくしていきたいということでした。

さて、コッペは何を残してきたのか。継続してきたこと自体評価していいことだと思いますが、当初の思いはどうなっているのか。差別に対するアンテナが弱くなっていないか。また、社会に対する働きかけもそうだが、共に働くの内実はどうなっているのか。障害のあるなしに関わらず、互いをどう尊重し、どう理解していけるのか。

正直30年近くなってもあまり進歩がないような気がします。少しさみしいですが。それでも当初3人から始まって、今は20人以上の人が働き、売り上げも公的な補助金も、初めたころとは比べものにならないくらい大きくなりました。それなりにみんな仕事を楽しみ、平均工賃も5万を超えました。

なにより30年近くコッペを続けてきたおかげで、地域の皆さんにも認められ、コッペに通ってくる障害当事者の姿も当たり前前の風景として街に根付いてきています。施設として特別な目で見られることなく、あそこのパン屋さんで働いている人として。障害者も地域の中で共に生きるということを社会に訴える、何よりの実践であろうと誇りに思っています。

しかしながら、今後の10年・20年のビジョンを明確に描けていないのも現状です。これからも皆さんと一緒に悩みながら前に進んでいきたいと思えます。

～コッペ30年の歩み～

【1】コッペの成り立ち

1987年4月ごろから、在日外国人の問題に取り組んでいたグループや障害者の問題について活動していた市民活動のグループの中で、誰もが共に働ける場を作りたいと話し合いを始める。

*障害者も地域の中でともに生きる場として 差別をなくしたい

*障害者にも労働する権利を 能力主義を見直す

*安全でおいしいものを 社会のあり方を見直す

1988年12月開業

*障害のある人1名、障害のない人2名から始まる 大阪の「ぽっぽ」で研修

*パン・クッキーの製造・販売 卸売り中心

*お店ではなく工場としてアパートの1Fを賃借 家賃8万円

*開業資金 中心になったものが多くを出資

不足は、個人・団体からの「債権」を集める 計600万ほど

→今でいえば市民による起業 当時でいえば脱サラ

*公的・民間の補助は何もなし 補助をもらうという発想もなかった

*売上 始めて6～7年目で100万/月→コッペの給料だけで生活するスタッフを雇えるようになる

1997年 仙台市に補助に向けた相談を始める 障害者6名

10月 運営母体 麦の会 (任意団体) 創設

1998年 10月 仙台市より、小規模作業所としての補助を受けられるようになる

2000年3月 麦の会がNPO法人格を取得 市民活動の中から始まったという思い

2007年4月より 他の作業所と合同で新NPO法人フルハウスを作り、就労継続支援B型へ移行

利用する制度は変わっても、共に生き働くという理念は変えない

利用者という意識ではない

2018年2月 認定NPO法人として認定される

寄付控除が受けられる。社会的信用をより得られる。

【2】運営上の危機

*障害者も共にと、安全なものとの両立がじつはむずかしい

→準備期間の不足とお互いの思いの共有が十分ではなかった。

*お金の分配方法 少ない利益をどうわけなのか 公平な配分方法は？

*売上の伸びと忙しさ 専従スタッフの交代 メンバーの入れ替わり→設立時のメンバーはいない

*人と人とのつながりを求めたはずが、切れていくばかりといった時期もあった

→何より人間関係が大切

【3】なぜ、続いたのか

*コッペを必要とする障害当事者がいたからこそ…障害者メンバーの方が続いている

*美味しいといってくれる人がいたからこそ…商品の力

*大変だけれど、基本的に楽しいから

障害者がいることにより、みんなの働き方は違わざるをえない

【4】行政とのかかわりと法人格の取得

口コミで障害者の人数が増えてくる→売上だけでの運営の限界

1997年 仙台市に補助に向けた相談を始める

10月 運営母体 麦の会 (任意団体) 創設

1998年 10月 仙台市より、小規模作業所としての補助を受けられるようになる

2000年3月 NPO法人格を取得 NPO法人麦の会

→個人が代表者となっている運営の限界・公的な補助をもらっていること責任

2007年4月より フリースペースソレイユと合同で新NPO法人フルハウスを作り、就労継続支援B型へ移行

*障害者自立支援法の成立・・・大きな制度の変更

【5】コッペの現在の状況

*定員20名 障害のある人 18名

身体1級1名 療育手帳A 4名 療育手帳B 10名 精神 3名

*障害のない人 8名 (常勤スタッフ5名 非常勤3名) ボランティア数名

*2017年度実績 訓練等給付費 年2,937万円/年間

売り上げ 年2,056万円/年間 (月175万円平均)

→給付費欲しさに、障害者をむやみに入れない

売り上げが同じで障害者が増えたら工賃は上がらない

*アパートの1Fを賃借 作業場 78.58㎡ 店舗・休憩室 43.69㎡
賃借料 月27万3千円 駐車場代 月3万円 (4台分)

【6】工賃

平均工賃 50,000円ほど (2万~7万)

*障害の軽重で差はつけない 能力給は否定する

*コッペにいる期間・時間で考える

*障害メンバーの時給 555円

*1年目 11,000円 2年目537円×時間×0.4 3年目×0.5 4年目×0.6

5年目×0.7 6年目×0.8 7年目×0.9 8年目537円×時間 現段階
での上限 75,000円

【7】給与・仕事の考え方

*お金をどう分配するかは、常に議論的である。

少ない利益をどうわけるのか 公平な配分方法は？

*2・3月に全員で次年度の給料を話し合う

→スタッフの金額を含め、全員の給料の額はオープンにしている

*基本的にトータルのお金が足りないので、満足はできないが互いに納得する線で、決着する

*コッペの主役…商品であるパンとクッキー。それを作るために、みんなで力を合わせていく。

できる人もいるし、できない人もいるし、集中が続かない人もいるが、それぞれが補って商品を作れればいい。やっているうちに、それぞれの得意技に役割分担ができていく

障害のない人は、障害メンバーがどうしても難しい部分をする。流れをスムーズにするように気を配る。丁寧な支援はできないが仕事が鍛えてくれている。

コッペのスタッフ・・・気持ちはパン屋。福祉施設職員ではない。

【8】成果・課題・将来展望は

*30年近くにわたりコッペを続けてきたおかげで、地域の皆さんにも認められ、コッペに通ってくる障害当事者の姿も当たり前前の風景として街に根付いてきている。施設として特別な目で見られることなく、あそこのパン屋さんで働いている人として。

→障害者も地域の中で共に生きるということを社会に訴える、何よりの実践。

*まずはいかにして継続していくことができるか

商売として 福祉の現場として いつつぶれるか、わからない場所

小さいことの良さと、運営の安定は両立しない？

*障害メンバー賃金アップ

*他の事業所・団体との連携で

*商品開発・販売

*生活支援

*後継者問題

まだまだ課題は山積です。

コッペ30周年

阿部 希

本当におめでとうございます。感謝
しています。パーティも素晴らしかったです。
コッペ30周年が沢山思い出もあるでしょう。
楽しかった。ママを残したコッペの皆も
ここまで良く元氣張ってくれた事大事にしたい。
コッペとは仕事為に糸売けてきくと
元氣張のは仲間の力なって進む事です。
これがコッペ30周年パーティです。

🌸 コッペ 30周年パーティー 🌸
🍪 ^{ヒーロー} コッペ 🍪 斎藤 七恵 🌸

コッペ 30周年と聞いた時、もうそんな
に、たったのか……？って
ビックリしちゃいました。🍪 ^{いちごジャム} コッペ

その時から、クッキーの準備やメッセージ
書いて〜って、たのまれたり、色々と

忙しかたです。😊 🍪 🍪 🍪

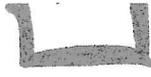
30周年パーティーでは県外の入も
多くの人に来てくれました。

昔一緒に働いた人も来てたので
本当に嬉しかたです。

テーブルが一緒だった人と色々
とお話しが出来て嬉しかたです。

すごく、優しい人でした。良かった😊
テーブルの人達と楽しくワイワイ

出来て、良かったです。😊

あと、バラライカさんが 
演奏をしてくれました。 

とてもすばらしかったです。 
みんなも楽しそうでした。 
私もとても楽しかったです。
最後にみんなと写真がとりたかった
なあ 

でも、みんなといい時間を 過ご
せて、なにより、すごく楽しかったです。
人が沢山あつまって良かった。 
楽しく 過ごせて、本当に良かった
です。 

一日は長かったけど、とても
楽しい一日でした。 

へへ   
にこにこ

コッペ30周年記念パーティー

鎌田啓夢

2月10日日曜日に「コッペ30周年記念パーティー」が始まります。「仙台サンプラザ」3Fでは「シンポジウム」お話を聞いたり各施設のみなさん方に名言詞を配りました。中は暑かったです。シンポジウムが終わったら16時に「クリスタルルーム」へ移重かします。1トパソコンでスライドショーを始めます。17時10分に宴会場で齊藤七恵さんと荒木博子さんが司会を務めました。初めのあいさつをコッペの飯嶋さんがメッセージを言いました。乾杯のあいさつは、僕と明石澄子さんが2人で言いました。M席のみなさんとお食事をしていきます。17時15分はバラバラパフォーマンスの演奏をしています。コッペのみんなで歌ったり踊ったりしました。18時に閉会します。コッペ30周年記念パーティーの盛り上がりしました。帰りは尾崎君を車に乗せてもらいました。夜は寒くありません、家でスツを着替えました。とても楽しかったです。

P.S

「買れない受付」にあたるたしましたが無事に終了しホッとしました。

(啓夢の母)

2月10日(日)コッパ30周年パーティー

サンパワサカレレトきました。

たしさんのゆま云云はいいめで、

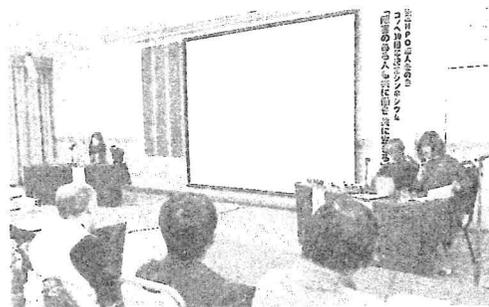
司会をしました。ものすごく緊張しました。

ミシミチちゃんにおうえんしてもらいました。

ミシミチちゃんのおうえんのおかげで
司会をかんじめることができました。

いろいろもよこもおいかったこと、氏家大介

障害の有無を問わず働ける社会
づくりを探ったシンポジウム



仙
台

仙台でシンポ 事業展開語り合おう

障害者共に働ける社会を

障害のあるなしにかかわ
らず共に働く社会づくりを
考えるシンポジウムが10
日、仙台市宮城野区の仙台
サンプラザであった。障害
者が就労する事業所の運営
者が苦勞や今後の展開に
ついて語り合った。

NPO法人結の会(東京)

の脇田泰行代表は「シャムや
和紙を作って販売する活動
を説明。「障害者が集う場
をつくったが、社会と隔た
りを生み、差別を助長して
いないかと考え続けている
」と漏らした。

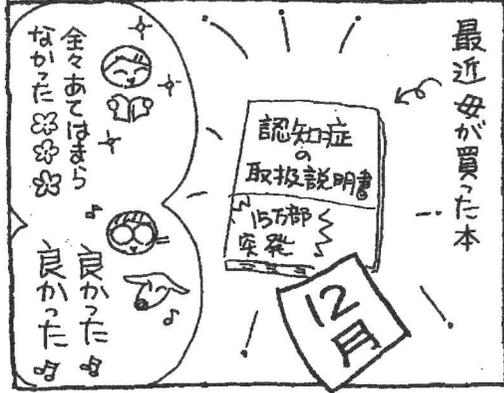
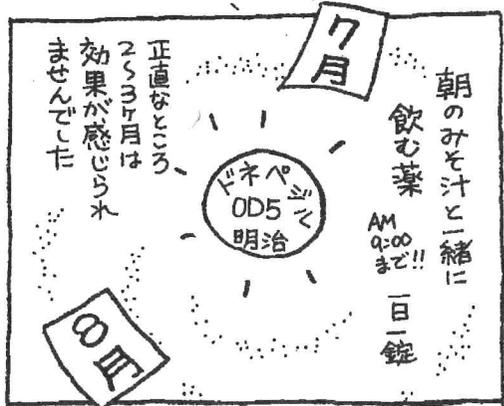
社会福祉法人共生シンプ

オニー(大津市)の中崎ひ
とみ常務は、クッキー生産
や演劇など多彩な事業展
開を紹介した。「働く人た

ちの多様性を認めてやっ
てきた。若い人に思いや
ウハウを伝えたい」と語っ
た。

シンポは、認定NPO法

人麦の会(仙台市宮城野区)
が主催。運営しているパン
とクッキーの工房「コッパ」
の30周年を記念して開催し
た。



★今年も一年ヨロシクお願いいたします。ぐか

14/26 河

障害者グッズ 完成度で勝負

仙台の就労施設 開発に奮闘



東北楽天の応援グッズになったトートバッグを掲げる（左から）沼崎さん、中島さんら。手前右に並ぶのが手拭い
＝仙台市青葉区が多夢多夢会中山工房

障害者の感性や発想を最大限生かしつつ、「福祉を前面に出さない商品」が仙台市内で増えている。福祉施設で描いた絵や模様を素材に、デザイナーらとの協働で高い完成度の商品に仕上げる。障害者の働きがいと収入増につながるが、売れ筋商品はまた一部。関係者は「グッズ自体の価値で選んでほしい」と話す。

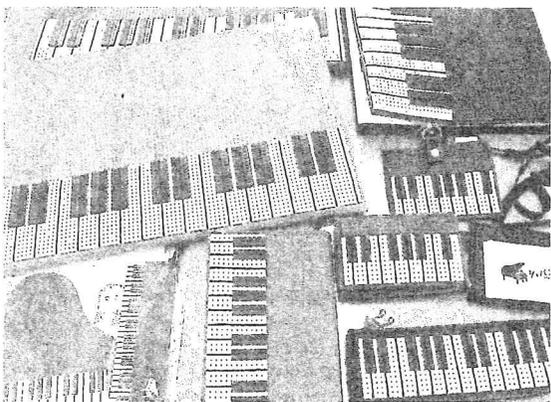
雑貨店。おしゃれな小物コーナーの一角に、今年3月から藍色やオレンジの手拭いが並ぶ。青葉区の就労施設「多夢多夢会中山工房」に通う知的障害者が、柔らかな丸の模様やアニメに着想を得た独自のキャラクターをデザインした。2014年、地元染め物業者と提携し、商品化。1枚1000～1200円で東京や神戸市など宮城県内

外の10店で販売する。

内装デザインの経験がある職員沼崎麻衣さん(44)は「作品にはなるべく手を入れず、大きさや配置、色合いを考える。目指すのは自分が欲しくなるような商品。ポツにすることもある」と明かす。購入後に福祉施設の商品と気付いてもらうのが理想だ。

多夢多夢会に通う中島敏也さん

感性生かし 販路開拓へ



みどり工房若林の人気商品「ショパンテ」

(36)は11月、チャリダーのイラストがプロ野球東北楽天の応援グッズに採用された。トートバッグなどが商品化されており、販売数に応じてデザイン料を受け取る。「人物を描くのが好き。商品になってうれしい」と喜ぶ。

精神障害者の就労施設「みどり工房若林」(若林区)が15年から販売する「ショパンテ」シリーズは人気商品に成長した。デザイナーと協力し、ピアノの鍵盤をモチーフにしたペンケースなど10種類をそろえる。昨年は約120万円を売り上げた。ただ、売れ筋を送り出す施設はまだ少数派。アートを仕事に生かす就労施設「アート・インクルージョン・ファクトリー」(青葉区)はノートや缶バッジ、Tシャツなどを製作。主な価格帯は2000～3000円だが、売り上げが月1万円台にとどまることもある。

元宝飾デザイナーの職員佐々木桂さん(31)は「商品はたくさんあるが、売り上げに結び付かない。若い感性のグッズが多いので、福祉バザーとは異なる販路を開拓したい」と語る。